

あいらの歴史と物語

発行責任者 始良歴史ボランティア協会
会長 竹之下 洲一
編集者 広報部 恒吉 一洋

連絡先：〒899-5421 鹿児島県始良市東餅田 498

始良市歴史民俗資料館 0995(65)1553



木崎原遺跡発掘調査現場近景（始良市蒲生町上久徳）〔鹿児島県立埋蔵文化財センター提供〕

縄文よりの使者

濱口 純則

始良市蒲生町上久徳で鹿児島県立埋蔵文化財センターが行っている木佐木原遺跡の発掘調査は、昨年が続いて2度目で、期間は昨年より長期間（6か月間）となっています。

付近では道路・橋梁工事が進められ、川岸ではすでに護岸工事が並行して行われています。

この地は蒲生城大手口から東北に約1kmほどの位置で、後郷川の左岸高台にあたります。戦国時代の蒲生合戦の際には、島津・蒲生氏両軍が入り乱れて戦った地域と推定されます。

現場の近くには、住吉池マール・米丸マール・おしき青敷火山といった火山があり、これら火山の噴火による火砕流や縄文海進の影響を受けて遺跡が地中に埋まってしまったと考えられます。

また、この周辺には埋蔵文化財包蔵地も数多く分布します。

遺物では、素焼き土器や色の付いた土器、縄文や線刻模様のついた壺や鉢などの土器など多くの土器片が出土しています。また、打製石斧、石鏃、軽石、火砕流が固まった岩なども見つかりました。黒曜石で作られたナイフや石鏃（矢じり）を発見すると、当時の人々の交流の広さと技術力の高さに驚かされます。

遺構としては、住居の柱と考えられる穴や竈の跡が見つっています。採取した土から花粉が見つければ当時の植物の種類が判明するかもしれません。動物の骨や化石などは出てきていません。今後の考察・検証の発表が楽しみです。

おおむらこじょう 大村古城をめぐって

竹之下 洲一



大村古城跡

川内川流域では、肥沃な土地をめぐり多くの有力氏族が争いをくりひろげてきました。

平安期末には大前氏が郡司として、鎌倉期以降は渋谷氏が地頭として、それぞれ多くの地域を支配してきました。さらに戦国期末には守護島津氏による統一事業が進みました。

祁答院町大村古城の攻防を見てみると、平安期末上手の瀧聞城にいた大前一族瀧聞氏の入城に始まり、南北朝期には、渋谷祁答院氏一族吉岡氏の支配下に置かれます。

さらに戦国期には、祁答院氏 13 代良重が大隅合戦で敗れると、島津氏は大村の地にも地頭制を敷き、大村古城は放置されていきます。

江戸期には古城の麓に地頭仮屋が設けられ、薩摩藩の直轄領大村郷として、安定した戦いのない時代を迎えることになります。

ずいせんざんえいげんじ るてん 瑞泉山永源寺の流転

恒吉 一洋

15 世紀の末、豊州島津家 2 代忠廉は瓜生野城主となり帖佐を領し、豊州家の菩提寺として平松に永源寺を創建しました。鹿児島福昌寺の末寺で曹洞宗です。この永源寺は、戦国期という乱世の中で 3 回もの移動を余儀なくされました。

文明 18 年 (1486)、忠廉は日向国飫肥に転領となり、永源寺を飫肥に移しました。その後、忠

朝・忠廣・忠親と飫肥を治めています。

しかし、日向伊東氏の攻勢を受け、忠親は子の朝久と共に都城に移り彼の地で病死しました。

6 代朝久は戦いを重ねながら、天正 15 年 (1587) 始良の平松上水流を拝領し、平松に居住しました。この頃に永源寺が平松に移されたとなると、1 世紀近く飫肥にあったこととなります。なお、朝久は文禄の役 (1592~1593) に出陣し、朝鮮で病死しました。

7 代久賀は永野地頭、帖佐地頭を経て寛永 11 年 (1634) には黒木 (祁答院) 地頭となり、のち黒木島津家を興して寛永 20 年 (1644) に 63 歳で没しました。

永源寺が黒木に移された時期は、久賀死去の頃あるいは円明院が移された元文 4 年 (1739) 頃と考えられます。その後、永源寺は明治の廃仏毀釈まで黒木の地にありました。

えんみょういん けどういん 円明院 始良から祁答院へ

橘木 國丸

円明院は平松の岩剣神社に隣接し、岩剣山神宮寺円明院と称された別当寺で、宗派は真言宗、本尊は虚空菩薩、開山は梅慶上人でした。

延享 2 年 (1745) 天台宗に改宗され、本尊は不動明王で豊州島津家の祈願所でした。

豊州家 7 代久賀が寛永 11 年 (1634) に平松から黒木に転領した後も、円明院はそのまま平松にありました。元文 4 年 (1739) 平松が再興した越前島津家の領地となったため、豊州家 12 代久起は円明院を黒木村に移し、福寿山願成寺円明院としました。寛保 2 年 (1742) 門前に金剛明王像 2 体を建立、廃仏毀釈の際は地中に埋め、破壊を免れました。

現在、2 体は常永寺の山門に移されています。



円明院仁王像〔薩摩川内市指定文化財〕

昔のことわざと道具

坂元 清美

歴史民俗資料館夏季企画展「体験！昔のことわざと道具」は、親子で体験に来られた方や、久しぶりに帰郷されたお孫さんと一緒に来館された家族連れなどでにぎわいました。

あるお母さんは、^{あしが}足踏み脱穀機を見て、「昔はこれを一生懸命踏んで仕事をされていたのを見たことがある」と子どもに説明していました。

また、久しぶりに帰郷した中2の男の子は、「昔の生活や戦後の生活の大変さがわかりとても勉強になった」「戦後の生活の苦労を知るとともに、今自分が恵まれた環境にあるか、実物に接し体験することで理解できた」といった内容の感想文を書いてくれました。



トン（唐箕）

^{もみ} 籾の選別をするトン（唐箕）に細かい紙切れを入れて模擬体験を楽しむ姿などもありました。

北山・木津志地区史跡ガイド

梅田 眞次

去る8月2日、北山小教職員6名の方々に、北山・木津志地区の史跡を案内しました。

今回は広報部5名で11箇所の史跡等を担当しました。2箇所の神社、2つの田の神、木津志の石橋、木津志小・^{せいび}成美小・堂山小・北山中の各学校跡めぐりとその歴史、梅北神社の祭神である梅北国兼^{うめきたくにかね}の生涯などの説明です。



神社での説明風景

暑いさなか、私たちの説明を熱心にメモされている姿が印象に残りました。

このような形で地元の史跡等を勉強されることについて、私たちがお手伝いできたことはとても良かったと思う一日でした。

楽しかった体験学習

岩元 康成



帖佐人形づくり

歴史民俗資料館では、今年度も夏休みの児童生徒を対象にした、トンボ玉・^{まがたま}勾玉・^{つらぶえ}土笛・Myはんこ・^{ちようきにんぎよう}帖佐人形づくり、そして遺跡発掘体験の6つの体験学習を実施しました。

どの体験学習会も定員いっぱい参加があり、参加した子どもたちは、体験活動に熱中していました。

遺跡発掘体験は、鹿児島県立埋蔵文化財センターにご協力いただき、蒲生町木佐木原遺跡で行いました。とても暑い中でしたが、



遺跡発掘体験

たくさんの土器や石器を見つけて喜ぶ子ども、まだ足りないと言ってさらに頑張る子どもなど、とても熱心に発掘していました。

また、もの作り体験では、指導者の注意を聞き、それぞれの作品を作り上げていました。

普段使わない道具や慣れない環境の中で、子どもたちのけがと体調には注意しましたが、全員が集中してとても頑張っていました。

このような体験学習を通して、子どもたちが始良市の歴史や文化に少しでも関心を持ってもらえる機会になればと考えています。

初代の加治木郷土館は
国の登録有形文化財です

宮内 伸一



加治木図書館〔旧郷土館〕

現在の加治木図書館は、昭和12年に加治木町役場が移転した跡地に、加治木出身の銀行家であった原田耕夫氏の寄贈により加治木郷土館として建設されました。陳列室は当時としては珍しい洋風展示館で、屋根を二重に連ねて玄関を突出させ、破風板は下端を厚くして洋風さを表現しています。

陳列館と日本館は洋風建築に和風建築を接続させた造りで、外観は一体ですが、内部は独立し、それぞれを尊重した造りとなっています。

また、付属の石造倉庫は、地元産の二瀬戸石(加治木石)を14段積み重ねた二階建て棧瓦葺で意匠的にも優れたものです。平成14年6月25日に国の有形文化財に登録されました。

当時、郷土資料館は珍しく、郷土史家の野田昇平氏(「島津義弘一代記」著者)をはじめとして、地域の方々が資料収集や館内展示品の充実に努められました。

現在、2800点余りの収蔵品があり、始良市内の薩摩焼窯跡の出土品や島津義弘公に関する資料などを中心に充実した展示になるよう努めています。



加治木郷土館展示風景

現在の加治木図書館は、昭和12年に加治木町役場が移転した跡地に、加治木出身の銀行

家であった原田耕夫氏の寄贈により加治木郷土館として建設されました。陳列室は当時としては珍しい洋風展示館で、屋根を二重に連ねて玄関を突出させ、破風板は下端を厚くして洋風さを表現しています。

また、付属の石造倉庫は、地元産の二瀬戸石(加治木石)を14段積み重ねた二階建て棧瓦葺で意匠的にも優れたものです。平成14年6月25日に国の有形文化財に登録されました。

当時、郷土資料館は珍しく、郷土史家の野田昇平氏(「島津義弘一代記」著者)をはじめとして、地域の方々が資料収集や館内展示品の充実に努められました。

現在、2800点余りの収蔵品があり、始良市内の薩摩焼窯跡の出土品や島津義弘公に関する資料などを中心に充実した展示になるよう努めています。

入館料は無料ですので、多数のご来館をお待ちしています。

<オットイにあった田の神さあ>

吉田 茂子

南九州の田んぼ周辺に見られる石像は、稲を守護する「田の神様」です。

人々は親しみをこめて「タノカンサア」と呼んでいます。蒲生町久末の高牧には、珍しいとてもべっぴんな女性のタノカンサアがいます。

ある年「オットイ(※)」にあつて長い間留守をしていた田の神が、ようやく里帰りしました。それからというもの、村人は我が娘を慈しむかのようにきれいに化粧を施し、石の祠に収め大切に守っています。メシゲを持ってアカンベーをしている姿は、エネルギーでいってなかなかセクシーです。



高牧の田の神

タノカンサアを盗んで不作から豊作になった村人は、米や焼酎など土産をたっぷり持って総出で神様を送

ってきます。盗まれた方の村人は歓迎の宴をもよおし互いの恵みを喜びあいます。タノカンサアは盗まれることを好み、たたらない神様といわれています。※オットイ=盗むこと

編集後記

私たち始良歴史ボランティア協会は、9月に祁答院方面史跡ガイド実践研修を行いました。

その中で黒木地区は、豊州島津家7代久賀が黒木島津家を興した所で、その関係史跡も数多くあり、たいへん勉強になりました。

私どもはこのように日頃からガイド研修に励んでいます。皆様方からのガイド要請をお待ちしております。(ご連絡は始良歴史民俗資料館へ)